

研修会の成果・課題

アクティブ・ラーニングの実践例を 普段から伝え、敷居を低くする

アクティブ・ラーニングの研修会を終えて約1か月半後の2015年10月、栗本嘉子校長とコアメンバー4人による座談会を開きました。研修会の振り返り、研修会後のそれぞれの変化について語り合っていた中で、アクティブ・ラーニングを校内に広めていくためのポイントと課題が見えてきました。

問いの工夫は、教科を超えて、 アイデアを共有し、話し合える

——先生方はコアメンバーとなった当初、アクティブ・ラーニングについてどのように思っていましたか。

鳥山 栗本校長からコアメンバーの話をいただいた頃まで、私は「アクティブ・ラーニング」という言葉に具体的なイメージを持っていませんでした。どのような新しい指導方法なのかと身構えましたが、さまざまな実践例を聞くうちに、アクティブ・ラーニングは特定の指導方法のことを指すのではなく、生徒がいきいきと自ら学習するようになることを目的として行うのだとわかりました。

中村 塩瀬先生からうかがったお話の他に、関連する書籍を読み、さらに校外の研修に参加する中で、次第にその内容を知るにつれ、アクティブ・ラーニングを自分の授業でももっと取り入れたいと思うようになりました。生徒たちが活発に話し合い、自分たちの力で学習を進めていく姿を見ることで、アクティブ・ラーニングの有効性を初めて実感できました。

——研修会で学んだことや印象に残ったことを教えてください。

黒岩 「よい問い」を他のグループに問いかけるグループワークは、大きな学びがありました。自分たちがよい問いだと思っても、相手が回答につまっ

たり、的外れな答えが返ってきたりして、「よい問い」は対象によって変わるのだと気づきました。問いかけ方について客観的に考える重要性を実感しました。

板谷 私たちのグループの場合、「よい問い」にするためにつけた制約が抽象的で、かえって答えにくくなっているのだと気づき、より具体的な問いに言い換えるようにしました。

中村 これまで、自分の問いかけに生徒からよい反応があっても、その要因まで考えたことはありませんでした。「問いをデザインする」という発想で問いを振り返り、今後の問いづくりに生かしたいと思います。

栗本 今回、教科横断で問いのデザインを学び、「よい問い」と「わるい問い」の条件を共に考える活動を通じて、問いの工夫が教科の壁を超えて検討できるテーマなのだ実感しました。よい問いをつくることは容易ではありませんが、大掛かりな準備が必要なものでもありません。まずは、この問いのデザインを切り口にして、アクティブ・ラーニングを広められればと期待しています。

学校全体で教員の取り組みを 共有することが大切

——先生方の実践からアクティブ・ラーニングの種を見つけるグループ

ノートルダム女学院中学高等学校

◎1952(昭和27)年創立。中高一貫の女子校。カトリック精神に基づく「徳と知」による教育で、「21世紀のLADY」の育成を目指す。2016年度、「グローバル英語コース」を設置。1学年の生徒数は約100人。



ノートルダム女学院
中学高等学校 校長
栗本嘉子
くりもと・よしこ



ノートルダム女学院
中学高等学校
鳥山拓
とりやま・たく

教務部長
数学科



ノートルダム女学院
中学高等学校
中村良平
なかむら・りょうへい
グローバル英語コース長
英語科



ノートルダム女学院
中学高等学校
黒岩かおる
くろいわ・かおる
数学科



ノートルダム女学院
中学高等学校
板谷悠子
いただに・ゆうこ
国語科

ワークの手応えはどうでしたか。

板谷 私が発表した貝合わせの取り組みでは、自分で想定していた社会科や数学科以外でも、「理科では貝の解剖ができる」「家庭科では貝を使った調理実習ができる」といったアイデアがたくさん出てきて、予想以上に他教科に広がる可能性を実感しました。自分が行いたい指導を他教科の先生方に相談することで、自分の発想を超える広げ方を知ることができると思いました。

黒岩 数人の先生から「実践の成果を校長室の横のボード（生徒が取り上げられた新聞記事などを紹介するコーナー）に掲示してはどうか」と提案され、各先生の取り組みを校内で共有することが重要なのだと感じました。私が紹介した取り組みも、実は先輩の先生が行っていた指導をアレンジしながら積み重ねてきたものです。アクティブ・ラーニングを学校全体の動きに発展させていくためには、この研修会のように、自身の指導を他教科の先生に知ってもらう場がもっと必要なかもしれません。

一度、その良さを体験したら また取り入れたくなくなった

—— この研修会后、ご自身の授業に変化はありましたか。

中村 私が担当する高校3年生のリーディングの授業では、夏季講習で挑戦したように、問題演習をペアワークで行う形式を継続しています。1学期までは講義形式の授業を行っていましたが、それでは夏季講習で見た生徒たちがいきいきと学ぶ姿は実現できないと考え、思い切って変えました。生徒たちが自ら学び方を考え、教え合う姿を見ると、今の授業形式にしてよかったと感じます。今後も、生徒に学びを委ねる時間を、いかに通常授業に取り入れるかを工夫しつつ、そうした授業が生徒の成績向上に結びつくことを確か

めていきたいと思っています。

黒岩 私は、生徒がじっくり考える機会が大切だと感じ、中学2年生の特別講習で学び合いを取り入れました。講習日の1週間前に、問題を1題書いたプリントを渡し、事前に考えておくように指示しました。そして、当日、受講者全員が、自分が考えてきたことを出し合って、正解を導いていくという取り組みです。「夢中になって取り組んでいたら、夕食の時間が過ぎていた」という生徒もいて、問いを出すタイミングも重要だと感じました。

鳥山 私は今、高校2年生を受け持っていますが、以前から、疑問点が出てきたら、生徒同士の話し合いを授業の中で促してきました。ただ、それは、ある程度、良識のある高校2年生だからできる授業だとも思っています。生徒たちが自由に活動したとしても、授業から大きく外れたりしないという安心感を持てるかが、生徒に学びを委ねる際のポイントになるのではないのでしょうか。

中村 同感です。私も、低学年や学力が厳しい生徒たちに、どのように学びを委ねられるかについて不安があります。生徒の状況に応じて、生徒が主体的に学ぶ活動を取り入れ、まずは黒岩先生が言われたように、その成功例を共有し、教員間で広めていくことから始めるのがよいかもしれません。

黒岩 私がアクティブ・ラーニングを行う際に課題に感じているのは、アクティブ・ラーニングの方法が特別であればあるほど、不公平感を訴える生徒がいることです。他のクラスで行われた活動が自分のクラスでは行われないことに、生徒は敏感に反応することがあります。

栗本 クラス間の公平性は必要ですが、先生方の個性が生きる授業はどんどん推進してほしいと思いますし、それが保証される環境づくりも重要だということですね。

アクティブ・ラーニングに 触れる機会をまず増やす

—— 課題はいろいろありますが、そのような中でも、校内でアクティブ・ラーニングを広めるにはどうすればよいと思いますか。

鳥山 まずは回数と時間をかけて、アクティブ・ラーニングの効果を実感してもらおうことだと思います。

板谷 先生方は日常の授業や業務に追われています。職員会議や教科会で、問いのデザインの重要ポイントを復習する機会を設けたり、自分の工夫を報告したりと、アクティブ・ラーニングに意識を向ける時間を定期的に設けるとよいのではないのでしょうか。

鳥山 その際、先生方が自らアクティブ・ラーニングを行えるように、先生方への問いかけ方が重要だとも考えます。意識や理解の程度が異なる先生方も話し合えるテーマにする必要があるでしょう。

黒岩 コアメンバーが日常的な雑談の中で、問いのデザインについて話題にするようにして広めていく方法もあります。改まった場よりも草の根的に自分の取り組みを広めて、アクティブ・ラーニングの良さを実感してもらえれば、自分事として捉えてもらえるように思います。

中村 生徒が英語力を高められる授業をオールイングリッシュで進めていくために、アクティブ・ラーニングが必須の要素だと考えています。生徒が自ら英語を使って表現したり、他者とかかわりながら思考を深めたりする上で、効果的な問いや課題の出し方を探っていきたいと思っています。

栗本 大学入試改革の全貌が見えない中で指導改善を進めるのは難しいですが、アクティブ・ラーニングが求められているのは確かです。問いのデザインという種をまいたのですから、その意識が育つように取り組みを深めていきましょう。